

《第 518 回(2024 年 11 月 14 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:15 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『木の中の魚』 リンダ・マラー・ハント／作, 中井はるの／訳 講談社

11月は「世界の本の読書会」として、国際交流員を招いて開催しました。課題図書はアメリカ人作家、リンダ・マラー・ハントによる小説『木の中の魚』でした。主人公アリーはディスレクシア。新任のダニエルズ先生がサポートしてくれることになり、友達や家族にも助けられ、段々と自信を取り戻していきます。

国際交流員からは、アリーが7年間で7回学校を変わっているのは、お父さんが軍人だから勤務地が変わるためではないかということや、Roy G. Biv の虹の話などを聞きました。学校が変わることにより、新しい学校の先生には、反抗しているだけなのか障害があるのかが分かりにくくなるとのこと。また、アメリカの教師には、学校で教えながら、自分も大学で勉強をしているという人も多くいるそうです。タイトル「木の中の魚」はアインシュタインの言葉とされているそうですが、本当のところはわからないようです。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●ディスレクシアの人の視点で書かれていて、どんなに大変か分かった。それぞれ違った個性を持った友達ができたことが良かった。誰かに認められることが大切。

●アリーが読めないことに、先生早く気がついてという思いで読んだ。友達のキーシャとアルバートの関係が良かった。読み書きのレッスンのときに先生は見抜けないのか。

●まわりに気づかれず、アリーが傷つくのがつらかった。ディスレクシアの子どもを見つけるには専門の知識が必要。まずはディスレクシアについて知ることが大切。

●苦しい思いをしているアリーを肯定するダニエルズ先生が素晴らしい。人それぞれの能力を認めて、評価してあげることが大事だと思った。

●タイトルに惹かれて読んだ。アリーは勇気がある。いじめられたり、読み書きができなくてもちゃんと学校に通う。こういう本を子どもに手渡すことができる大人が必要。

●ダニエルズ先生が出てくるまで読んでいてしんどかった。「ひとり」と「ひとりぼっち」の違いを説明できるアリーはすごい。目で見える面だけで判断する危うさを感じた。

●アリーの頭の中で始まる映画は、著者自身にもそう見えているのかなと感じられた。花束をキーシャと分け合うところや蝶をつかまえようとするところが良かった。

●アリーは家族に恵まれているのに、お母さんにも本当のことが言えない。キャラクターが楽しく、ダニエルズ先生のネクタイの柄が違うところも面白かった。

●ダニエルズ先生は生徒に歩み寄ってくれる。アニーのことを理解し、寄り添っている姿が良い。IMPOSSIBLE は POSSIBLE になる。心に残る本。

●こんなにも気づかれぬのかと思った。教育の質によって違ってくるのは怖い。子どもに責任はない。みんなが能力を伸ばせる環境が必要だと思った。

●異なった個性を大切にすることが大人が必要。失敗を恐れるよりも、気づくことが大切。居心地の良い場所を自分で見つけることができると良い。

●アメリカでも昔は学習障害があることになかなか気づけなかった。今はもっと知識が広がっている。深い話だと思った。

●学校の先生の働き方の違いを感じた。日本の先生は忙しくて、先生をしながらか勉強するのは難しそう。ディスレクシアと言っても、ひとりひとり違う。

●自己肯定感が大事だと感じた。アリーも最初は自己肯定感が低い。まわりに認められることが大切。

●知識がないとディスレクシアに気づくのは難しい。サポートする側もされる側も、ほんの少しの勇気があるといいと思った。お兄ちゃんもサポートを受けられて良かった。

次回 12月12日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

☐『小学生からの SDGs』 深井 宣光／著, 伊藤 ハムスター／イラスト

KADOKAWA

※申込み・参加費は不要です。